

模擬

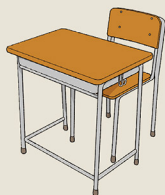
授業

野口芳宏
NOGUCHI Yoshihiro

その効果

と活用

授業上達への
王道にして、
最良の近道！



極めて具体的、直接的な行為、行動によって
授業の技法を伝える方法。

その開発者にして超一流の実践者である著者が、
初めて詳らかにする模擬授業のすべて。

模 擬 授 業

その 効 果 と 活 用

野口芳宏
NOGUCHI Yoshihiro

◎まえがき

まず、本書に目を止めてください、御縁を戴いた先生に御礼を申し上げます。本書は、「模擬授業」の実践的な解説書としては必ずお役に立てて戴けると考えています。と申しますのは、授業の実践的な力を高める新たな方法として「模擬授業」に気づき、その具体的な活用法を開発したのは私だからです。

それまでの授業力向上の方策としては、実際に授業を公開し、参観者や講師から批判や指導を受けるといふ公開法、主に文献を読んで学ぶ文献学習法、また、上級者・ベテランの授業を直接見て学ぶ参観法、あるいは自分の授業をテープやビデオに収録して長短、適否を分析吟味する記録分析法などが用いられてきました。それらは、それぞれにそれなりの効果がありましたが、その時、その場で、吟味、検討したり、すぐに代案や対案を出して比較、検討するという即時、速攻の納得ができるという点からは難がありました。

模擬授業という具体的、直接的な行為、行動によって授業の技法を伝えるという点からすると従来法は、いずれも難点を抱えていたわけです。「こうすればいい」という事実や行動をその場で実際に共有できる、という点で、模擬授業による授業技術の研修は画期的だと言えましょう。本書が、学校現場の授業力を進展させることに少しでも貢献できれば著者としてこれに勝る喜びはありません。どうぞ、大いに役立ててください。

模擬授業という言葉で、授業研究の向上に新生面を生み出した私としては、もっと早くこのような本を出したいという思いはあったのですが、なかなかその機会を得ぬまま遅延していました。

この度、教育関係書の専門出版社である株式会社さくら社の横山駿也社長、同良知令子副社長のお計らいによって、念願の夢が叶うことになりました。心からありがたく、感謝申し上げます。

また、長年に亘る勉強仲間の一人である畏友、柳谷直明先生には、本書執筆に当たり、実際に授業をしている先生方の日々の実践に役立つようにと多くの助言、御支援を戴きました。対談や質疑の形を取りながら現場に役立つ情報を私から引き出し、それらに答える私の言葉をその場でパソコンに打ち込むなど、泊まりこみでの労力提供もして戴きました。

一冊の本が世に出るその陰には、多くの方々のお力や励ましや、支えがあるのだということを、改めて思います。そして、最終的には本というものは多くの方の手に渡り、読まれなければ意味がありません。その意味で、本書の読者の先生に重ねての感謝を記してまえがきいたします。

令和六年 十一月吉日

野口芳宏

第1章

模擬授業とは

◆1 模擬授業の発祥 12

- 【1】 模擬授業前史 12
- 【2】 「うとてとこ」の模擬授業 13
- 【3】 模擬授業に際してのお願い 15

◆2 模擬授業と通常の授業 17

- 【1】 情報・知識の入手、獲得——「入手、獲得」が多いほどよい授業なのだ 17
- 【2】 解釈・技術の訂正、修正——「訂正、修正」が多いほどよい授業なのだ 19
- 【3】 深化、統合——「深化、統合」が多くあるほどよい授業なのだ 19
- 【4】 反復、定着——「定着」のための「反復」が多いほどよい授業なのだ 21
- 【5】 上達、向上——「上達、向上」の事実が多いほどよい授業なのだ 22
- 【6】 活用、応用——「活用、応用」させる場が多くあるほどよい授業なのだ 23

◆3 模擬授業と追試 24

- 【1】 模擬授業の本来 24
- 【2】 追試による普及、拡大 26

模擬授業と追試の類型

◆4 模擬授業の効用 28

- 【1】 授業の醍醐味の体験 28
- 【2】 授業技術の体得 29
- 【3】 授業技術展開法の習得 31
- 【4】 教材解釈の充実 32
- 【5】 教科内容への開眼 34
- 【6】 授業公開への自信 35

◆1 模擬授業の四類型 40

- 【1】 示範・解説型模擬授業——授業技術の解説と指導が目的 40
- 【2】 研修・協議型模擬授業——授業技術の練磨が目的 41
- 【3】 研究・学会型模擬授業——学術的当否の吟味、研究が目的 42
- 【4】 評価・判定型模擬授業——志願者の授業力の評価と判定が目的 42

◆2 模倣と追試の違い 45

- 【1】 追試の四相 45
- 【2】 「うとてとこ」は創案型追試 48

模擬授業の構成要素

- 【3】 それぞれの追試の型への期待 49
- 【4】 「追試」論文への期待 50

1 教授話法 52

●教授話法六つの秘訣 53

- 【1】 ゆっくり、はつきり 53
- 【2】 聴衆反応の診断 54
- 【3】 どんな話も「対話」が基本である 54
- 【4】 一文を短くする 55
- 【5】 具体例を引く 56
- 【6】 キーワードを使う 57

2 発問の作り方、与え方 58

- 【1】 「発問」は現場用語 58
- 【2】 「発問」と「質問」は別物 58
- 【3】 「発問」の教育的意義 59
- 【4】 「発問」をつくり、発するのは教師 59

【5】「発問」の成立とそのメカニズム 60

【6】発問の効用は相互の落差の明示 61

【7】よい発問の条件 62

【8】発問の性格 66

【9】指導事項と発問づくり 69

3 板書法

74

【1】黒板がなかったら 74

【2】板書本来の目的 75

【3】「必要なこと」とは何か 75

【4】板書の機能特性を生かす 79

【5】板書文字の書き方 80

4 ノート作業

84

【1】ノートの三つの機能 84

【2】知的生産基地としての〇×方式 85

【3】〇×方式の問題点と対策 87

【4】形成的評価としての〇×方式 88

【5】発言の一つとしてのノート 89

【6】ノート作業は全員参加の基本 90

5 机間巡視 100

- 【7】 身につけたい四つのノート技能 95
- 【8】 ノート技能を伸ばす方法 98

【1】 机間でするのは「巡視」 100

【2】 個別診断のために 101

【3】 教師の指導に求められること 102

【4】 机間巡視における言葉かけ 106

【5】 机間巡視の具体的ポイント 110

【6】 次の授業展開につなげる 112

6 指名技法 115

【1】 指名の意義 115

【2】 学習意欲を喚起する指名の技法 116

7 評価 121

【1】 正解志向から変容志向へ 121

【2】 一斉から個別へ——「挙手・指名」から「作業・巡視・指名」へ 123

【3】 減点法から、加点法へ 124

【4】 評価のキーワード 124

深掘り授業観

【5】一斉指導における評価 126

【6】学びに向かう力・人間性等を評価する 129

◆1 状況の論理と計画の論理——攻めの技術と受けの技術 136

【1】「指示」「発問」は、攻めの論理 137

【2】「受け」の論理はその場で授業者が生み出すもの 138

◆2 授業の「束ね」と学力形成 142

◆3 教材内容と教科内容 144

◆4 素材研究と教材研究 148

【1】素材研究の必要性 148

【2】事実を語ることはできる 149

【3】原文、本文を読み、書き込みをする 152

【4】野口流・教材研究の仕方 152

◆5 伝わること、伝わらないこと 154

【1】伝わる「技術」とその意義 154

模擬授業の実践事例

- 【2】 伝わる表情と雰囲気 156
- 【3】 模擬授業でも伝わらないこと 157

- ① 小学校一年 「くじらぐも」 164
- ② 小学校四年 「ごんぎつね」 168
- ③ 小学校五年 「大造じいさんとガン」 172
- ④ 開発教材 詩「青い花」 176

模擬授業の目指すところ

- ① 目指すべき授業の在り方 182
 - 【1】 上手い授業とよい授業 182
 - 【2】 研究計画 184
 - 【3】 研究と工夫 185
- ② 流行と不易 188

第1章

模擬授業とは

1 模擬授業の発祥

授業の仕方については、誰でも上手になりたいと思っている。だから、学校へ講師を招いて授業法の話を知りたいということはどこでもやっている。私もそういう場に呼ばれて、何回も話をしてきた。私の話によって授業が改善されるだろうと思っていたが、現実はなかなか改善されない。なぜ、話だけでは伝わらないのかと疑問を持っていた。

【1】 模擬授業前史

私が千葉大学教育学部附属小学校に勤務していた昭和五〇年頃、千葉市内に住んで附属小に通っていたことがある。その頃、八千代市に詩の授業部会ができた。国語部会とは別の詩の部会である。私は名指しで招かれて、その部会に付き合っていた。

授業の仕方を言葉で話すのに限界を感じていた頃なので、先生方を相手に授業をやってみせることにした。その授業の節々で授業行為の狙いや意図を話す方法である。

「今の子供の発言をそのままにしておいたのは、こういう意図だったんだよ。」

そういうことを話してみた。このような方法を、「立体授業解説」などとも言っていた。これがかなり好評だった。

私はこのとき、授業力の高め方についての新しい発見をしたように感じた。

子供向けの発問ならば、先生方は当然全員が正解をするとはかり思っていた。しかし、玉石混淆の多様な解が出るのだ。先生方がこのような状態だと、この先生方が教える授業は一体どのようなことになっているのだろうか。子供向けの私の面白い授業を再現し、そこに授業解説を加えながら伝えるのは有効かもしれない、と模擬授業の可能性を感じた。

子供の授業を見た後に、誰かが「話し合いをどうさせたらよいか」と質問してることがある。そこで私はこうやるとよいと、五分ぐらいのミニ授業をやってみせて、解説を入れる。すると、なるほどとうなずいてくれることになる。

先生方に「授業の話」をするだけでなく、先生方を相手にして、「授業をする」と分かりやすい。先生方への模擬授業は画期的な指導の方法だと思った。これが私の模擬授業の発祥である。この時点では模擬授業とは呼ばずに「立体授業解説」と呼んでいた。

【2】「つうてい」の模擬授業

八千代市での立体授業解説から五、六年経ち、千葉大附属小を出て、木更津市立西清小学校の教頭になった。その後、向山洋一先生のエデュケーション・テクノロジーの法則化運動に誘われた。はじめはお断りをしてしたが、

同僚の根本正雄先生に誘われ、向山先生から直々のお誘いのお手紙をいただき、これ以上お断りするのは失礼だと思い、法則化運動に参加するようになった。向山先生は「子供の解の方が深い」と書いた私の雑誌論文を御覧になり、私の実践上の懐の深さを評価されたようだった。

法則化に参加した教頭二年目の五月、向山先生から、ゴールデンウィークに行われる二〇代講座の講演を頼まれた。春の農作業が忙しいときである。私は水田一・五haでの稲作も行っていた。耕運機を操り、水田を耕しながらも、講演内容を考えた。法則化で学ぼうとするほどの先生方は勉強熱心である。私がする程度の話は百も承知だろう。そう考えながら農作業をしているうちに日は過ぎて、とうとう、講演内容が決まらないまま会場に着いてしまった。

「私は、講演はできない。そこで、皆さんを相手に授業をする。」

講演の最初にこう言うと、会場がどよめいた。そこでやったのが「うとてとこ」の模擬授業である。発問をし、その意図を伝え、ノート作業をさせた。発言をさせたらその根拠を問うことが大事だ。根拠を示させないといけない、とこのように解説を加えながら模擬授業を進めたら、参観者は授業のポイントがよく分かるとみんな喜んだ。向山先生は私のこの授業を「名人芸授業」と名付けた。私は恐縮して名人芸授業という呼称は止めてくださいとお断りした。二年かけて、「模擬授業」と呼ぶことになった。これが法則化での私の模擬授業の始まりである。

この二〇代講座の模擬授業の原点は、八千代市の詩の部会での公開授業である。八千代市の詩の部会の会員が公開した「うとてとこ」では、詩の本文を最初から全部見せていた。公開授業後に、あれ

では面白くないと批評した。最初から全文を見せたら駄目だと話をし、その代案模擬授業として私が「うとてとこ」を行った。なるほどそれは好評だった。少しずつ教材を見せながら進めていく方式なので、私は「絵巻物式」と呼んだ。これをアレンジして、法則化運動の二〇代講座では、さらに修正を加えて行ったので、これが大好評だった。八千代市での絵巻物式の立体授業解説以来、私は「うとてとこ」は何回か授業をしていたので、本文は暗記していた。そこで、二〇代講座では教材も持たずに行ったのでこれも功を奏したようだ。

【3】 模擬授業に際してのお願い

そのうち新米教頭で赴任した木更津市の西清小学校で研究主任を務めた多田元樹先生から、八ミリ映写機が欲しいと申し出があった。当時はかなり高価だったが、校内予算で購入した。そして、早速多田先生に請われ、子供に向けた「うとてとこ」の授業を私が公開し、それを多田先生が八ミリ映写機で撮った。

模擬授業には、タイムリーな解説が入る。だからよく分かる。次の会からは、私からお願ひして、「模擬授業」ということにしていた。世に「模擬試験」とか「模擬面接」とか、「模擬裁判」という言葉はあるが、「模擬授業」という言葉は一般化されているわけではない。教育用語辞典にもなかった。

模擬授業というのは、要するに先生方を見立てて授業をすることである。あるいは、先生方に子供になったつもりで授業を受けてもらう方法である。

しかし、先生方は先生であって子供ではない。子供になんかなれっこない。そこで私は、模擬授業をするに当たっては先生方にいつも次のようなことをお願いしている。

-
- 1 むりに子供になろうとしないでください。自分の力いっぱいのをし、力いっぱいの発言をしてください。
 - 2 子供だったら、などとは考えないでください。そういう「子供のふり」をしなくて、一人の人間として力いっぱい授業を受けてください。
 - 3 つとめてひねくれずに、素直な気持ちで授業を受けてください。自分に忠実になることが一番大切です。
-

要するに、先入観や使命感や義務感を捨てて、一人の平凡な人間に立ち返って授業を受けて欲しいということだ。そうすることによって、より純粹に授業を受ける子供の立場に近づき得るわけだ。

● 著者紹介

野口芳宏 (のぐち よしひろ)

1936 年千葉県君津市生まれ。千葉大学教育学部卒業。公立小学校教諭、千葉大学附属小学校教諭を経て、公立小学校教頭、校長を務める。退職後、北海道教育大学教授、植草学園大学教授等を歴任し、現在植草学園大学名誉教授。「鍛える国語教室」研究会、授業道場野口塾各主宰。また 2009 年 7 月 -15 年 12 月千葉県教育委員を務めた。

著書『教師の作法 指導』『授業づくりの教科書 国語科授業の教科書』（以上、さくら社）、『利他の教育実践哲学―魂の教師塾―』（小学館）、『野口芳宏 第一著作集全 20 巻』『同 第二著作集全 15 巻』『鍛える国語教室シリーズ』（以上、明治図書）、『野口流 授業の作法』『野口流 教室で教える小学生の作法』（以上、学陽書房）等多数。

ブックデザイン 佐藤 博

模擬授業 その効果と活用

2024 年 12 月 2 日 初版発行

著 者 野口芳宏

発行者 横山駿也

発行所 株式会社さくら社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-20 ワカヤギビル 5F

TEL : 03-6272-6715 / FAX : 03-6272-6716

<https://www.sakura-sha.jp> 郵便振替 00170-2-361913

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

© Yoshihiro Noguchi 2024, Printed in Japan

ISBN978-4-908983-63-4 C0037

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

*乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取り換えいたします。